

ちゅうせい
中世

今回は、展示されている資料の中から2つにしぼってご説明いたします。

中世は、鎌倉時代から戦国時代までをさします。この時代の主な展示資料には、
銅造如来形三尊懸仏^{どうそうによらいけいさんぞんかけほとけ} (室町時代^{むろまちじだい}) や相馬文書^{そうまもんじょ} (鎌倉から江戸時代) などがあります。中世の相馬市は、
宇多郡と呼ばれていました。宇多郡^{うたごぐん}の支配者^{しはいしゃ}は、鎌倉時代以降南北朝時代にかけてつぎつぎと変わ
っていき、南北朝のおわりごろ、相馬氏の支配となりました。戦国時代はとなりの伊達氏^{だてし}と接したため、
伊達氏との戦いが長い間続きました。そして1590^{てんしょう} (天正18) 年、豊臣秀吉^{とよとみひでよし}の「奥州仕置^{おうしゅうしおき}」をむかえ戦
国時代は終わりをむかえます。

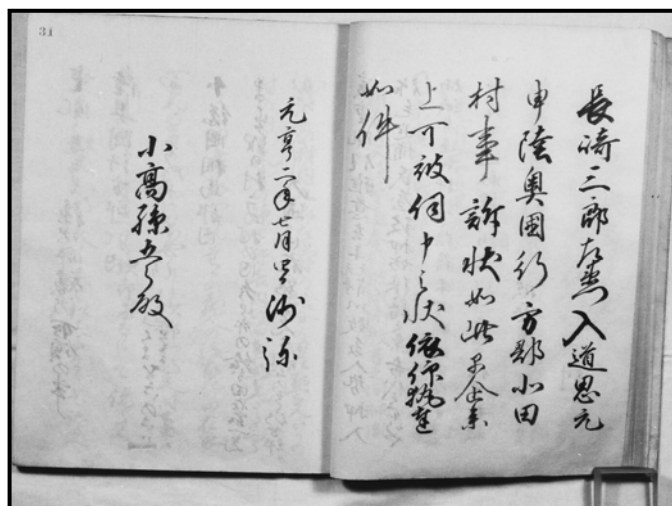
Q 源頼朝はどのように幕府を開き、武士による政
治をはじめたのだろうか？

Q 相馬氏はどのように領地を広げていったので
しょうか？

●相馬文書^{そうまもんじょ} (東京大学史料編纂所^{しりょうへんさんじょ}の影写本^{えいしやほん}) …… 鎌
倉時代は、12 世紀のおわりころ源氏のかしらで
ある源頼朝が、鎌倉 (神奈川県) に役所をおいて、

武士による政治を始めた時代です。そのころ、相馬氏は、下総国^{しもふさのくに} (千葉県・茨城県) を治めていた武将
でした。初代、師常^{もろつね}は、奥州平泉攻めのはたらきを源頼朝に認められ、行方郡^{なめかたぐん} (南相馬市) の支配をま
かされました。その後、師常^{もろつね}から数えて 6 代目の重胤^{もろつね}は、元亨年間 (1321～1324) ころに行方郡の太
田村別所館 (現在の太田神社) に移り住み、現地支配を強め、標葉郡^{しねはぐん} (現在の双葉地方)、宇多郡 (現
在の相馬市・新地町) へと領地を広げていきました。

相馬文書は、鎌倉時代なかごろから江戸時代初めまでの貴重な資料です。この資料は、相馬氏の
領地の相続関係のものと東北地方の政治状況をしるすものの 2 つに大別できます。



そうまもんじょ
相馬文書

●^{どうそうによらいけいさんぞんかけほとけ}銅造如来形三尊懸仏[・]・室町時代、14 世紀の中

ごろ、足利氏が京都の室町に幕府を開きました。武士が京都に政権を築いたのははじめてのことでした。そのころの相馬氏は、行方郡（現在の南相馬市）の支配をかため、標葉郡（現在の双葉郡）へと所領を広げていく時代になります。

^{どうそうによらいけいさんぞんかけほとけ}銅造如来形三尊懸仏は、^{にょらいさんぞん}鏡の板、如来三尊ともすべて銅で一体的に作られています。三つの



^{どうづくりにょらいけいさんぞんかけほとけ}銅造如来形三尊懸仏[・]

仏様はいずれも手を合わせている仏様で蓮華の台にすわっています。この^{かけほとけ}懸仏^{とくちやう}の特徴は、三つの仏様とも衣服のすそや両方のそでの先を台のところまで垂らしているところでもあります。このような形式は、鎌倉時代以降に鎌倉地方を中心に流行し、中通り、会津にも作例はありますが、数は極めて少なく、懸仏の例はあまりありません。なお、この懸仏のつくられた年は、15 世紀、今から約550年前と考えられます。